最終講義に代えて

ディープインパクトよ…お前に何があったのか

法学部教授　髙橋治男

暗転―悪夢のような凱旋門賞

昨年の凱旋門賞には、日本の三冠馬ディープインパクトが参戦したので、この国民的アイドルの勝利を見ようとパリに出かけたファンがたくさんいた。わたしもディープはひょっとすると一〇〇年に一度の名馬ではないかと思っていたので、パリの友人にEメールを発し「一〇〇ユーロ分の馬券を場外で買ってくれ」と頼んだ。結果はご存知の通り、ディープは善戦むなしく3着に惜敗した。わたしは、2～3着馬のワイド馬券も買っておいたから、賭金の半分は戻ってきたけれども、やはり久々の実戦で初コース、芝の深い粘土質の馬場では、そうやすやすとは「飛べ」なかったのかもしれない。

3着でもディープの強さは高く評価され、早くも翌年の凱旋門賞の有力候補と見なされていた。ところが帰国後まもなく、二〇〇六年で引退し、年が明けたら、五一億円のシンジケートを組織して、種牡馬生活に入ると報じられた。そして一〇月半ば、フランス・ガロは、レース後に採取したディープの検体から禁止薬物の気管支拡張剤、イプラトロピウムが検出されたと発表したのである。

その結果、ディープインパクトは失格となり、3着賞金は繰り上がり3着馬と4着5着馬に配分され、管理責任者である池江寿郎調教師には、一五、〇〇〇ユーロ（約二三〇万円）の制裁金が課せられた。問題のイプラトロピウムは、鼻炎、喘息、風邪、気管支炎などの薬で、咳の吸引治療のためにシャンティイのフランス人獣医師の処方にもとづいて購入し、その指示にしたがって九月二一日から二五日のあいだに使用したという。この薬は日本では市販されていない。関係者の報告によれば、施療のあいだに2回ほど馬が暴れてチューブが外れ、馬房内に薬が飛散したことがあり、敷き藁や干草に付着した薬品をディープが摂取した可能性がある、とのことだった。風邪の治療をしていた以上、じつは絶好調と言える状態ではなかったのだ。

フランス・ガロのこの決定のあと、JRAは、日本から帯同した獣医師に対しJRAの診療施設の貸与を6ヶ月間停止する処分を下している。

実際に禁止薬物が検出された以上、処分そのものはいたしかたないが、それが体内に残った原因については、どうも釈然としない。「寝藁の薬品をディープが摂取した」との説明は仮説でしかなく、どこかに別の真実が隠れているような気がしてならなかった。そこで、わたしは、JRAの図書室に行って、日刊の競馬専門紙や雑誌を調べるだけでなく、一般紙で報じられた凱旋門賞にかんするフランス側の記事を可能な限り読んでみた。

仏紙誌の見方・日本人論

するといくつか興味深い発見があった。まず、日本の競馬ファンの熱狂ぶりをフランス人はかなり奇異に感じていたのである。レース前後の東京＝パリ便はすべて満席。凱旋門賞の観客は通常五万五千で、そのうち一万五千がイギリス人だが、今回は日本からの来客で六万を超えるだろう。日本のジャパンカップの観客動員はつねに一四万を超える。『リベラシオン』紙は、レースの前日にこのような日本の現象をつぎのように分析していた。

「大方のアジア人と同様、日本人もあらゆる種類の賭け事が好きである。しかし日本の競馬は第2次世界大戦後のアメリカの影響が強いから、その点でほかのアジアの国々と異なっている。つまり古くは大英帝国の植民地であった国とは違って、日本の競馬には過去の屈辱的余韻がない。そしてこれは文化の問題だが、日本人は優秀な同時代人の神格化を

好む。美しく華奢で疾風のように疾駆する人馬は英雄視される。電子工学やコンピューター産業と同じく、日本人はサラブレッドの生産においても大発展を示した。だが主としてアメリカから導入した血脈だけでは近親交配が強まるので、ヨーロッパの血統を導入しようと、スローテンポのレースで鍛えられたフランスのサラブレッドに注目し始めた。自国の賞金のほうがはるかに高額であるにもかかわらず、彼らは、ヨーロッパ最高の凱旋門賞の、権威が欲しいのである」

「日出ずる国」の競馬はつねにエンジン全開

レース後の『パリ・チュルフ』は、「狂乱のインパクト」との見出しをつけ、ディープと日本人応援団の反応を詳しく報じている。「かりにハリケーンランがジャパンカップに出走したとしても、日本まで出かけてゆく記者とファンの数はごくごく少数であろう」と指摘した後で、六千人を超す日本のファンがスタンドを埋め、直線中ほどでディープが先頭に立ったときのスタンドのどよめきは、遠くポルト・ドーフィーヌやポルト・マイヨーまで聞こえたのではないかと書いている。「歓声はなお20秒ほど続いたが、やがてディープがレイルリンクとプライドの強襲に屈するや消えていった。それにしても『日出ずる国』の競馬はつねにエンジン全開で、様子を見るということはないのか」と初コースのぶっつけ本番を暗に批判している。また、ファンの反応については「土産のためにひとりで一〇部ものプログラムを持ち去り」、単勝人気が一倍そこそこになるほどの大金を投入してまで、「記念馬券を持ち帰ろうとする人たちの日章旗で、日曜日のロンシャンはとても陽気であった。だが、薄闇迫るスタンドの階段には、遅くまでうずくまって涙にくれる乙女たちの姿があった」。

ディープインパクトを連続特集した競馬専門紙

不手際か過失か無理解か

ある論説委員は、競馬界ではほかのスポーツに比べて薬物使用の基準が極端に厳しいが、それは優れた馬の生産努力として意味のあることであり、いわゆるドーピングと治療の区別をつけない現状では、専門家は「馬の治療か出走かを選択せねばならない」という厳しい意見を述べている。同時に、イプラトロピウムの使用法とその体内残留期間について、シャンティイの獣医が詳しく説明したはずだが、その指示が正しく守られなかったのは、「不手際か過失か、それとも無理解によるのか」との疑問を呈した。

二〇〇七年最新号の雑誌『クルス・エ・エルヴァージュ（競馬と育成）』も「ディープ側は控訴せずに屈服した」と総括した上で、薬が残留した原因を「スタッフの過失か、それとも言語の無理解であろうか」と述べている。

この件ではあまり多くを語らなかった池江寿郎調教師は、おそらく、スタッフを信じかつ守る方針を採って、潔く制裁を受けたのだろう。わたしも不正などあるはずがないと信じているが、過失か言語の無理解はありえたと思う。そして、後者の可能性が最も高いであろうと推測する。わたし自身は、長年フランス語を教えてきた上に、個人的にはフランス贔屓であるけれども、言葉の問題にかんしては、治療法の指示に際して（あくまでも仮説に過ぎないが）、獣医師の側にも、親切ならざる反応がありえたかもしれないし、そのとき日本のスタッフ側も理解するまでとことん質問しなかった可能性もあると考えている。

じつは、フランス・ガロの裁定は、日本ファンの熱狂現象と直接には何の関係もない。だが、薬物検出によって「凱旋門賞の名誉が汚された」と見なし、かつ応援フィーヴァーを皮肉のこもった冷ややかな眼で見ていたフランス人の感慨には、通底するところがある。熱狂とは、どだい自分本位なものではあるけれども、あまりにも身勝手な独りよがりに陥ると、反感を買うことになるであろう。びくびくせよと言うのではない。他人がどう見るかを知っておこうとする意識や、自己を客体化する神経が皆無の場合には、真の文化交流が成り立たつはずがないからである。

（高橋教授の専門分野は20世紀フランス文学。07年3月31日付で退職されます）

私の最終講義

オニール『終わりなき日々』
―『不倫』の謎と成熟衝動

文学部教授　長田光展

『終わりなき日々』（１９３４年１月８日初演）は難産の末の作品でしたが、オニール（*）の全作品のなかでも最も評判の悪いものでした。主人公ジョンの不可思議な不倫を扱う作品ですが、この不倫の意味が批評家たちには十分に理解できなかったのかも知れません。

＊ユージン・～（１８８８年―１９５３年）。アメリカの近代演劇を築いた劇作家。１９３６年ノーベル文学賞受賞。

主人公と仮面の男＝自己の分身

作品は、ビジネスマンであるジョンが執務室で小説を執筆しているところから始まります。傍らには彼と年齢も背丈も服装もまったく同じラヴィングという男がそれを覗き込んでいます。この男はジョンの顔の仮面を付けていますが、作者のト書きによれば、それは「唇に嘲りの冷笑を浮かべていたかつてのジョンのデスマスク」とあります。この事実は、ラヴィングとジョンが同一人物であり、もっと正確に言えば、ジョンが今生きている生身のジョンであるなら、ラヴィングは過去のジョン、言い換えれば、成長を停止し、固定化したジョンの内なる偏見とトラウマを擬人化したものであることを示しています。オニールは自己の分身である二人を使うことで、彼自身の半生の総括をしようとするのです。

ジョンは主人公の成長過程をこんな風に描き出します。７歳までの主人公は幸福そのものであり、完全無欠とも見える父母の愛に育てられます。両親は敬虔なカトリック信者で、その神は、限りない愛の神、命の創造主としての神でした。しかしその神が、７歳のとき寄宿学校に入れられるとともに変化を始めます。寄宿学校で「処罰する神」を教え込まれるからです。「愛の神」は徐々に「復讐の神」に変わり始め、そして15歳のとき、少年の幻想を決定的に破壊する出来事に遭遇します。父母の死です。父が病に倒れたとき、少年は一心に神に祈るのですが、父は死にます。少年の心に神へのかすかな疑いが生まれます。ついで看病疲れによる母の病。少年は神を疑ったことへの神の処罰ではないかと恐れながらも、母の回復を願って神に祈ります。しかしまたしても繰り返される母の死。少年は自分の中で「何かが切れる」を感じます。

それ以降、主人公は神を限りなく排除し、合理的に生きようと決意をします。大学に入るとともに無神論者になり、ついで社会主義者、ニーチェ主義者、そしてマルクス主義の共鳴者、東洋の哲学と宗教に憧れる神秘主義者など、さまざまな思想遍歴を重ねた後は次第にペシミズムを強め、ついに愛の哲学に行き着きます。妻への愛は、彼が人生最後に見つけた唯一の真実、「愛の宗教」とも言っていいものでした。

「愛の宗教」と不倫

これはすべてオニールが実際に経てきた思想遍歴ですが、にもかかわらず、主人公は不倫を犯します。救済となる「愛の宗教」を破壊する彼の「不倫衝動」とは何だったのか。オニールは、小説の主人公に仮託したジョンの不倫心理の正体を明らかにすることで、オニール自身の自己総括をしようとしたのです。

ジョンは、主人公の（実は自分自身の）不倫の発生をこんな風に語ります。結婚は彼にとって、父母の死後に経験したはじめての至福でした。だが、彼は妻を愛したことに躊躇も憶えます。その幸福感が彼に恐怖を与えるからです。妻のいなくなったあとの侘びしさを想像するからです。結婚後、はじめて妻が留守をしたとき、主人公はたちまちパニックになり、妻の災難をあれこれと想像してはいてもたってもいられなくなります。

彼が友人のパーティーに出かけたのはその恐怖を逃れるためでした。だが、不倫はそこで発生します。しかしその不倫は彼が求めたものではなく、友人の奥さんに仕掛けられたものであり、彼は事の成り行きを嫌悪し、争うまでするのですが、そのとき突然妻の顔を思い浮かべた途端、不倫は起きたのです。彼自身にも、その理由がわかりません。間もなく物語がジョン自身の物語であること気づいた妻のエルザは、激しくジョンを責め、嫌悪し、拒絶します。不可解な不倫衝動を悪魔の仕業としてエルザに説明しようとするのですが、エルザに通じるはずもありません。

ジョンのトラウマであるラヴィングこそが張本人であるのですが、ジョンの心理を解説してこう言います。「僕は本当は愛を憎んでいるのさ」と。しかし、分裂した自我の対立によってオニールが描こうとしたのは、実はラヴィングが代表する合理的な自我意識がもつ短絡性という思考のメカニズムなのです。ジョンが愛に躊躇するのも妻を愛していないからではなく、それがあまりの至福ゆえに二度と手放したくないと思うからです。ジョンの不倫行為も同様に、「愛への憎しみ」から発していたのではありません。至福喪失不安と至福回帰願望こそが原因であり、それを「愛への憎しみ」と理解するのは、合理的理性という知的悪魔ラヴィングの所産なのです。

理性で語り得ぬもの

この作品の原型は、「カトリック少年時代の劇」と題する覚書でしたが、そこに流れているのは、理性主義に対する深い反省でした。そこにはこんな記憶に残る部分があります。

「「妻の死後」彼女の手紙を読み、日記を読んで、やっと妻という人間が分かり始める。彼女の情動、自分の情動を、あのように合理的に、分析的に、説明し尽くそうとさえしなかったら、あるいは、彼女の理性の不合理な働きをあのように軽蔑さえしなかったら、彼を充足させていたであろう妻」

神父ベアードは、ジョンの後悔を見て言います。「君の物語には宿命があるのだよ、君自身の心のひそかな渇望を通して君に明かされた神の意志という宿命がね！」。人間の心の深部には、神にも似た全能の力が宿っているのかもしれません。その声に静かに耳を傾けるとき、「成熟」という「神」が私たちのなかに現れてくるのでしょう。

（長田教授は英語文学文化専攻、専門はアメリカ演劇。07年3月31日付で退職されます）